

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. はじめに

最近の新聞報道やメディア報道で気になることがある。それは、2011年度の最大関心事件の東日本大震災の報道姿勢である。

地震や津波は自然災害である。しかし、それにともない生じた原子力発電所の重大事故も想定外ですましてもらいたくないということである。

「文殊菩薩と文殊の智慧」の教えを学び、多く人々の英智を活用する生き方の実践を考える。

「四弘誓願を学び実践する」で、人の上に立つ経営者や管理者は自利のみ追求せず、自他も含み考える「自利、自他」の高い仏教精神を学んでいただき、「人生最終住宅＝墓＝羅漢＝野仏を考える」で、世界最速の次世代スーパーコンピューターの時代、1秒間に1京（京は1兆の1万倍）回の計算ができる時代へ突入したとはいえ、人間の死はさけて通れず、無差別平等に訪れることを考え、人のために役立つ「終の住処」、いわゆる人生最終住宅を考えてみることにしたい。

それは、四苦八苦の人間界に生きる苦しき、いわゆる生老病死の四苦と愛別離苦、求不得苦、怨憎会苦、五蘊盛苦の四苦を加わえた八苦の人間の生き方についての仏教の教えを学び、大きく進歩する科学文明に対し、ともすると遅くれる精神文明の物の見方、考え方について考究、学ぶことにする。

科学文明と精神文明の習合がない限り事故は起るといことも併せ考えてみたい。

人間の過信と油断で、如何に優秀な次世代スーパーコンピューターが生まれても、ヒューマンエラーは避けられないことを肝にめいずべきであると考え。

2. 文殊菩薩と文殊の智慧

仏教の教えに、文殊の智慧という教えがある。その教えは、一般に「三人寄れば文殊の智慧」という娑婆、いわゆる人間社会に生きる智慧として語りつがれている。娑婆とは苦しみが多く、忍耐すべき世界の意で我々が現実に住んでいる人間社会をさしている。

その教え原点は、初期の大乗教典、とくに般若教典に登場する文殊菩薩（文殊師利、曼殊尸利とも音写される）の般若＝智慧の教えに由来する。

それは、自己一人の悟りを求めて修行するのではなく、悟りの真理を携えて、現実の中におりたち、世のため人のための実践、いわゆる慈悲利他行を行い努力修行する諸菩薩の指導者的な生き方を説いている。

釈迦如来の脇侍として、普賢菩薩と一対で釈迦三尊として存在する。人の上に立つ人々への教えである。

世間では「三人寄れば文殊の智慧」とは、愚かな者でも三人集まって相談すれば文殊菩薩のようなよい智慧が出るというように解釈されているが、その教えの基本は、いろんな人の英智を集めて物事に対応しなさいという教えである。

それは、それほど知識、根拠もなく自己の判断によって決める独断専行をしない英智の結集をして物事を決定、すすめることの教えである。

例えば、東日本大震災による事故についても地震学者、津波学者と現地の人々等の協力である。ともすると人の意見を無視する場合があるが、文殊の智慧の基本は文殊菩薩の「空に立脚するその智慧」が文殊菩薩の特性であり、それは、1) 聞慧、いわゆるいろんな意見を広く聞く智慧。2) 思慧、いわゆる道理を思惟して生じる智慧。3) 修慧、意見を聞き、正し方法を考究し、実践する智慧。この聞思修の「三慧」の実践が文殊菩薩の教えである。

「空に立脚する智慧」とは、己れ一人の知識、判断に左右されない、いいかえると先入観をもたない心の余裕を意味することである。

経営者や管理者、あるいは行政の責任ある地位のある方々に必要な教えである。

「先入観」に左右される管理の手法は、「やれといったらやれ」という、ともすれば一方通行になりやすい管理手法といえる。それは、結果として、言葉の通じない地獄の世界である。人間の世界では「文殊の智慧」で、多くの人々の英智を集め活用する姿勢が大切である。いわゆる言葉の通じる世界である。

自分の専門外は、素直に人の意見を聞く耳をもちたいものである。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪（野風生）
雅号 樹泉